

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 北澤直宏	留学機関名 ホーチミン市人文社会科学大学
留学先国名 ベトナム	留学期間 西暦 2010年4月～2012年3月
研究テーマ ベトナムの政教関係－カオダイ教の事例から－	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は、ベトナム社会主義共和国における政教関係の分析を通して、政治と宗教の依存及び拮抗関係をより実証的に明らかにすることである。1986年のドイモイ政策採択以後、ベトナムの宗教は度々その活発性が指摘され、正に「宗教の復興」と呼ばれる現象が起こっている。この現状を理解する為に新宗教カオダイ教に着目し、政府と当該教団がどのように折り合いをつけ、共存しているのかを明らかにする。</p> <p>カオダイ教はフランス植民地時代の1926年ベトナム南部で成立した宗教であり、仏教やキリスト教を融合した教義や、自前の軍隊を組織し、隣国カンボジアをも含む一大勢力を築いていた過去を特徴としている。1975年、ベトナム戦争終結後は共産党により組織を解体させられるも、90年代政府により公認されて以降は活動を再開させ、南部にあるホーチミン市に隣接するティニン省は、聖地として観光地と化すに至っている。現在、その信徒数は国内人口の1%と少数派ではあるが、公認宗教団体としては仏教・カトリックに次いで3番目に規模が大きい。新宗教ゆえに教団の結束が固く、ティニン省を中心に著しい凝集性が確認できることが、他宗教との最大の違いとして挙げられる。</p> <p>ベトナムの宗教に関する先行研究は、千年王国運動を中心とした歴史に関するものを除けば実践に着目したものが主であり、そこで述べられてきた事は現実の多様性に過ぎなかった。そこでは多様性や地域の特殊性を強調するあまり、国家や教団といった社会組織まで捉えるには至っておらず、他地域との比較研究は少ない。研究の多くは首都があるベトナム北部地域に集中し、経済の中心地である南部を分析したものは著しく少ないなど、分野・地域共に偏りが見られるのが特徴である。一方、本研究はカオダイ教を通して当該地域社会の理解に寄与するだけのものではない。政教関係がいかに変化し現代社会で展開されているかを明らかにする点において、普遍的な学術的テーマを備えていると言える。</p> <p>これまでの研究</p> <p>ベトナム政教関係解明の為に、政府と教団双方の対応を明らかにしなければならない。既に提出した博士予備論文（修士論文に相当）では、ベトナム政府が公認宗教団体として各宗教組織を認めることで、地下に潜んでいた諸宗教を行政の目の届く範囲に置くと同時に、専門の行政組織を設置し対応していることが明らかとなった。政府の管轄に入ることは即ち規定に従うことでもある為、今日の宗教復興現象の裏で、政府はその管理体制を変えつつも維持拡大しようとしていると指摘することができる。</p>	

# 成果報告書

記入日 2012 年 4 月 20 日

氏名	北澤直宏	留学先国名	ベトナム	所属機関	ベトナム社会科学院
研究テーマ：					
留学期間： 2010 年 4 月 ～ 2012 年 4 月					
<p>本研究の目的は、ベトナムの新宗教カオダイ教を通し、近代国家における政教関係を考察することであった。政府の力が強いベトナムにおいて、宗教研究の多くは国のプロパガンダ研究や個人レベルにおける信仰の多様性といった分野に集中している。本研究は組織としての教団活動に焦点を置くことで、この問題を克服しようとしたものである。1947 年以降、フランス・アメリカに協力し共産党に敵対してきたカオダイ教であるが、それ以上の言説は政府・教団側双方から意図的に避けられる傾向がある。政治的理由から、ベトナム戦争中の文献資料は没収され散逸しており、以降のものは非公開となっているのである。この問題を克服する為に 2 年間という留学期間、聞き取り調査をしつつ資料収集を行うという形で調査を行った。結果的には調査・研究が可能なだけの文献資料を入手することができ、これによりインドシナ戦争 [1946～] から現在に至るまでのベトナムの政教関係を考察することが可能となったように思う。</p>					
<p><b>1. 留学期間の調査内容</b></p> <p><b>2010 年 4 月－2011 年 2 月</b></p> <p>ホーチミン市にある国家第 2 文書館にて南ベトナム時代(ベトナム国 [1949－1955]・ベトナム共和国 [1955－1975])におけるカオダイ教の諸活動に関する資料の閲覧・収集を行った。ここに所蔵されている資料は政府による教団の軍事・政治活動に関する報告書が殆であった。同時に社会科学院附属図書館、ホーチミン市総合科学図書館において研究書や研究雑誌を閲覧することで、ベトナムにおける最新の宗教研究を把握することに努めた。休日などは、市内のカオダイ教寺院にて信者と接触し交友関係を広げていった。11 月からはカオダイ教の総本山があるタイニン省への調査許可の申請を始めた。その過程で大学や研究所所属のベトナム人研究者と知己を得、滞在中幾度となく貴重なアドバイスを頂くことができた。</p> <p><b>2011 年 3 月－2011 年 10 月</b></p> <p>タイニン省へ移動し、聞き取り調査及び資料収集を行った。この地において戦前・戦後を通し外国人が長期調査を行った例はなく、この機会を得ることができたのは大変幸運であった。タイニン省は住人の大半がカオダイ教の信者である為、その調査対象を総本山や省内 72 箇所にある末寺に絞り、その歴史・活動などについて聞き取りを行った。また渡航以来交友関係を広げていたことが幸いし、教団外で活動する信者を含め幅広い層の信者と接することができた。</p> <p>また省立図書館には 75 年～85 年までのカオダイ教に対する行政資料が所蔵されており、これらを閲覧できたことは、近代の宗教事情を知る上で大いに意義があるものであった。さらに人脈が広がった 9 月以降は、信者個人宅所蔵の内部資料を提供して頂くことも多く、結果的に 1950 年代～2000 年代まで相当数の教団内部文書を入手することができた。</p> <p><b>2011 年 11 月－2012 年 4 月</b></p> <p>ホーチミン市に戻り、再び第 2 文書館にて資料の閲覧を行った。カオダイ教に関する資料を既に読み終えていた為、この期間は類似の政治宗教団体に関する資料を閲覧した。政教関係を考察する上で比較対象があるのは大変有益であり、この作業を通して以前より考察を深めることが可能になったように思われる。また人脈を生かし、3 度ほどに分けてベトナム中・南部の各地にあるカオダイ教寺院にて聞き取り調査を行った。加えて、月 10 日程のペースでタイニン省に赴き、引き続き資料収集を行っている。</p>					

## 2. 得られた知見

### ①1975年以前の話

1926年にフランス植民地下のコーチシナ(ベトナム南部)にて誕生したカオダイ教は、次第にナショナルリズム的性格を帯び始め、日本との連携を恐れたフランスにより1941年に総本山は制圧される。しかしながら第二次大戦後、人員の少ないフランス植民地政府は各宗教勢力に軍事力を与え各地方を統治させる方針を採り、カオダイ教も47年にフランスに対し全面協力をする条件で軍隊の組織を許可され、その装備・給料などはフランスが負担することとなった。しかし宗教勢力内の軍人たちは徐々に宗教指導者と袂を分かちようになり、表向きフランスに従いつつも陰では略奪等の違法行為を繰り返す無法集団へと変貌していく。

フランスの撤退後、アメリカの意向を受けて1955年に誕生したゴ・ディン・ジエム政権はこれら各宗教勢力の特権を認めず、軍事力を含む全権力を国の下に再統一しようとした。当然これを良しとしない各勢力との間に戦闘が発生するが、そもそも支援を国に頼っていた宗教勢力には長期戦に耐え得る力は無く、徐々に降伏していく。カオダイ教は全面的な軍事衝突だけは避けたものの、軍隊は国軍へと編入させられ数々の特権もはく奪されることとなった。1956年に政府と結ばれた条約には、以後カオダイ教は政治活動を放棄し“純粋な宗教”として活動していくことが明記されている。この際、布教や礼拝といった宗教活動の自由が保障されただけでなく、徴税権・寺院内の防衛組織など戦略的な要素も残されることとなった。しかし63年のクーデターによりジエム政権が崩壊した後、国は再び積極的に宗教勢力を共産党との戦いに利用し始めるのである。

特にグエン・ヴァン・ティエウ大統領の時代[1965 - 1975]には、悪化する戦争からの避難先として、そして徴兵逃れという2つの理由から寺院内には人が溢れていたとされる。また国より膨大な金銭・物資などが支援として投じられた結果、総本山内には工場・ラジオ局を始めとする諸施設が充実し、戦略上の理由から幹線道路には多くの寺院が配置されるようになっていく。さらに歴代のタイニン省知事の殆どはカオダイ教徒が占め、その省知事の支配下にある軍隊も信者から構成されていた。その本山立地上の理由及び信徒の動員力から、カオダイ教は、南ベトナムの首都サイゴン(現ホーチミン市)を共産勢力から守る防波堤の役割を期待されていたのである。正にカオダイ教は、南ベトナム政府の反共政策に協力することで、その影響力を拡大させることに成功していたと言えるだろう。

この歴史を振り返ってみると、教団は常に政府との繋がりを重視する一方で、信者個人にまでは重点を置いていない様を読み取ることができる。例えばジエム政権との条約締結後には教団上層部が一般信徒の説得に苦勞した様子が読み取れる一方で、クーデター後になると連日ジエム政権への悪口を繰り返している。この政権が変わる度に前体制の批判を繰り返す行為は現在まで一貫して行われていることではあるが、そもそも国に賛同しないと教団の存在が危うくなる為か、その教団活動自体には一貫性は乏しいという点を指摘することができる。

### ②1975年以後の歴史

1975年のベトナム戦争終結後、南ベトナム支配下にあった諸勢力は混乱に襲われた。戦争中、一貫してフランス・アメリカに協力し共産党に敵対していたカオダイ教もその例外ではなく、教団上層部が共産党政権との協調路線を打ち出し保身を図る一方、教団内部には下級聖職者を中心に反共武装集団が続々と組織された。これらへの対処に当初は手をこまねいていた政府であったが、やがて直接手を下すことなく教団を内部分裂させる方針が採択される。76年から77年にかけて、カオダイの悪行を一般信徒に対し分かり易く伝えると同時に、罪を犯した信者を公の場で自己批判させることによって篤信を失わせようとするキャンペーンが展開され、一部聖職者を政権側に取り込んだり、一般信者に上級聖職者を批判させることで教団内に不協和音を生じさせようとする工作も行われた。しかし思ったような成果は上がらず、以後政府はより直接的な政策を打ち出すようになる。

78年には政府主導の下で教団の改造案が完成し、その直後に反共団体の拠点総本山内にあると判断した政府により教団施設は一斉搜索された。これにより大量の反共産党活動が明らかとなり、この結果を受けて翌79年には教団は解散させられることとなった。同時に12人の高位聖職者から成る新組織が設立され、さらに神託の放棄を宣言、土地を含む教団財産は「公共」の為に国へと譲渡され役所・学校・農地として利用されることとなった。この教団解散からの一連の決定は教団の自発的なものという体裁をとっているが、その内容や前後の公文書からも国の指導下で強制されたものであることは疑いが無い。それと前後して他の反共団体も密告により壊滅し、80年には死刑8名・終身刑7名の判決が出ている。さらに83年には当時の教団指導者がクーデター未遂事件に関与していたことが発覚し、彼は自宅蟄居を命じられること

となった。これ以後カオダイ教徒による反政府活動は完全に下火となり、以降に就任した歴代指導者たちは国の主張を繰り返すだけの存在に成って行った。丁度この時期から省政府による年度報告書にもカオダイ教関係の記述が存在しなくなることから、既に教団が国の管理下に置かれ脅威ではなくなったことが推察される。

以後は国の主張である「純粋な宗教」になるべく礼拝以外の機能は排除されるのであるが、86年のドイモイ(改革開放路線)採択を経た90年代以降になると、教団幹部が選挙を経て国政に参加するようになり、教団自体も社会活動に参加するようになってきているが、その背景には宗教側に拒否権のない“国の依頼”があるのである。97年には仏教・キリスト教に次いで公認宗教団体として認定されているのであるが、これにより聖職者の叙任権は国が掌握し、国内にある末寺も新組織を頂点に再編成されることとなったことも忘れてはならない。これら一連の政策や90年代からの復興過程を振り返ると、対外的には復興してきているように見える教団であるが、その実態として誕生したのは国の御用団体以外の何物でもないと言えるだろう。

### ③教団の分裂

79年のカオダイ教団解散による影響は、寺院の閉鎖だけではなく、聖職者に対する帰郷の強制、宗教活動(礼拝・冠婚葬祭)の制限など多岐に及んだ。聞き取り調査によると、80年代を通して人が集まるような活動は許可されず、必然的に礼拝は家庭内だけのものへと変化していったとされている。これらの規制は90年代になって徐々に緩和されたのであるが、同時にこの時期から教団の内部分裂という別の問題が浮上してきたことが判明した。

この発端は教団の解散と新組織の設立に起因するのであるが、そもそもあらゆる宗教活動が許可されなかった時代において、この新旧組織の差異は問題にされなかった。それが90年代の自由化と共に表面化し、新組織が神託を用いずに行った改革(儀礼の改正[1991]、聖職者の昇進[1999])に対し、一部聖職者・信者たちが反発を示したのである。そもそもカオダイ教は、扶乩と呼ばれる自動筆記を通して得られる神託を非常に重視し、聖職者の叙任を含め何らかの決定の際には必ず神託に頼ってきた。これを無視するような変革を認めない者達は新組織から追放され、あるいは自発的に教団外へと去って行ったのである(以後、旧組織派と表記)。彼らの行く末は、家にて礼拝するだけの者・反新組織のグループを作り政府に訴えかける者と様々であるが、新組織内で働きつつも現状に不満を抱えている者も存在しており、その幅広い分布から今回の留学期間で全体像を掴むまでには至らなかった。あくまで印象であるが、旧組織派には教団の律法や儀礼に明るい知識人層が多く属しているものと思われる。

97年の公認化以降、新組織は国の強い後押しを受けて次々と各地にある旧組織派の寺を占拠した。しかし、その実態が知れ渡るにつれ旧組織派に寝返る寺が出てくるなど、その内部は混乱を極めている。寺・個人単位で今なお続くこの教団内紛の背景に、国の干渉があることは言うまでもない。確かに規制緩和に伴う資産の返却や聖職者の増加など宗教の復興は年々進んでいる(単純に寺院数だけ見ても、209[1983]→191[1998]→303[2002]→401[2011]と、ここ20年で倍増している。)。しかしそれは国営化されたとも言える新組織派に対するものであり、旧組織派には依然として葬儀の自由すら与えられていないことに留意する必要があるだろう。

### 3. 今後の展望

カオダイ教の歴史を分析してみると、政権が変わる度に教団活動が一新されていることが見て取れる。それは時勢を反映したものであるが、ここ30年ほどの変化を追って見ても、共産党の政策に沿って教団組織の質が大きく様変わりしているのは間違いない。この宗教の御用団体化という政策の遠因にはベトナムのWTO加盟[2006]に伴う欧米人権団体によるベトナム非難があると思われるのだが、今後は共産党による宗教団体への圧力がどう変化していくのか、注視していきたいと考えている。

また、そこまで政権に左右される教団なのであれば、これまで何を核にして存在してきたのかも明らかにしたいと考えている。宗教として変わらない部分は何なのか、個人の拠り所が信仰にあるとしても、教団組織として一貫している部分は何なのか考察し検討していきたい。しかしながら入手時期が帰国直前となったこともあり、南ベトナム時代の資料は全てに目を通している訳ではない。今後は入手した文献を読みこなしつつ、その成果を発表していきたいと考えている。

#### 4. 留学の感想

これまでも数ヶ月程度のベトナム滞在はありましたが、2年間という長期にわたっての調査は今回が初めてで、妙に苦労した記憶が残っています。当然、社会・文化などは一通り把握理解していたつもりだったのですが、その一つ一つは些細なものではあっても、時間が経つにつれて妙にその差異が気になってしまい、留学期間の終盤などはストレスを溜め込んでしまいました。言語に関しても、調査自体には支障はなくとも細かな言い回しやニュアンスの差異に苦労するなど、留学期間の終盤ほど全てにおいて悩まされたように思います。特に各種行政手続き・調査や研究過程を通して感じた社会主義国独特の一種異様な雰囲気は、忘れ難い記憶となって残っております。ただ後半ほど愚痴が増えてくるのは自分の見識が広がったせいでもあるので、客観性を保つ上でも半分ほどは嬉しく感じています。

渡航した当初は連日のように文書館・図書館に通っていましたが、ホーチミン市にある文書館や図書館所蔵の文字資料は一般的な内容であったり断片的過ぎたりで問題も多く、その効率的な使用方法を把握するまでには渡航後1年の時間を費やしました。政治的理由から敢えて触れない領域も多く、こういった書籍からでは分からないベトナム近現代史の流れを把握する上でも2011年3月から8ヶ月に渡ってタイニン省で調査できた意味は大きいものとなりました。

個人的な経験からも調査の内容からも、やはり特別に愛着があるのはカオダイ教の総本山があるタイニン省でして、良くも悪くも密度の濃い滞在だったように思います。移動直後から気付いたのですが、教団内部には深刻な対立問題が存在していました。もちろんホーチミン市でも勃発している対立なのですが、熱心な信者がいるタイニン省ほど表面化はしておらず、1年目の滞在中は気付いていませんでした。しかし、その対立に関して質問しようにも皆口が重く、さらに関係資料を入手しようにも公開されていない為に研究者泣かせの状況でしたが、振り返ってみれば色々な派閥の人と万遍なく付き合うことで、一方からの情報に惑わされることなく、客観性を保ったまま調査を進めることができたように思います。

しかしながら、いかに調査許可証があれども外国人研究者などは招かれざる客だったようで、政府諸機関・教団施設などではたらい回しにされるような日々でした。この扱いは最後まで変わらなかったのですが、それでも何とか調査できたのは多くのベトナム人の助力によるところが大きかったように思います。8ヶ月に渡る滞在中、特にお世話になったのはタイニン在住の郷土研究者で、省の歴史から地理・文化、そして今はタブーとされている南ベトナム時代の政治に至るまで週2回のペースで講義して頂きました。貴重な資料を提供して頂いただけでなく、当初は漠然としていた研究テーマを実現可能な段階にまで発展させることができたのは、彼のおかげだと思っています。

また僕は滞在中一貫して、教団の活動報告書など具体的な資料の入手に拘っていたのですが、現在タイニン省内に残っているのは教理書や教団編纂による歴史書であり、客観性に欠けている為に資料として使えるものではありませんでした。人物に関しても、立派な信者は誰でも知っており容易く会える一方で、客観的な話ができ具体的な書類を持っているような人物に会うことは非常に難しい状態でした。しかしながらこの一連の調査を通して、自分と信者との興味関心が違うということを感じると同時に、それまでは興味が無かった“個人にとっての宗教”というものに興味を持つこともできました。今後、組織や社会に焦点を置いて研究していくに当たり、この経験は生きてくるものと思います。綺麗な外見に対し複雑な裏事情があるという事実、その裏事情もそれぞれのイデオロギーによって錯綜している状態にあったのを、徐々に紐解いていくことができたのは研究を志す者として喜びであり、これは今後の自信に自信に繋がっていくものと思われまふ。しかし振り返ってみるとこの期間は文字通り一喜一憂するような毎日でした、やはり全てが人脈に恵まれた上での結果のようにも思われてしまいます。

少々心苦しく思うのは、一部信者の人たちは誤解していたようですが、僕の目的は教団史を書くわけでも、カオダイ教の布教でもなかったということです。何度も聞かれるうちに敢えてと否定しないようになってしまったのですが、今後カオダイ教という事例を通した宗教研究において、その名を広めることはできるかもしれません。今後は投稿論文や学会発表を通し留学成果を発信していき、博士論文を執筆したいと考えています。

最後になりましたが、この機会を提供して下さった松下幸之助記念財団に心からお礼申し上げます。



旧暦元旦のカオダイ寺院



調査風景